

---

# こいんらんどりい。

新星爾咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こいんらんどりい。

### 【Nコード】

N8931G

### 【作者名】

新星爾咲

### 【あらすじ】

これは大きな都会の小さなコインランドリーのお話。洗濯機の中で回されるTシャツのような、群像劇。

## ミシエ(50)(前書き)

実際のコインランドリーをモデルとしているわけではありません。

## ミシエ(50)

今日も夜10時から出勤。

小さく息をつきながら、タイムカードを切る。

仕事は単純。清掃、監視。

考えることもいつも同じ。明日の夕飯のおかずと日用品のセール。

でも、あの日は違った。

あの日も、ペットボトルに詰め替えたお茶を飲みながら監視カメラを眺めていた。

と、私は思わず自分の目を疑った。

監視カメラに映る、くたびれた顔。

彼だ。

思わず事務所の扉を開ける。

「… 悟くん？」

彼はいぶかしげな顔でこちらを見つめる。

当たり前だ、20年ぶりなのだから。

「みつちゃん？」

壁に備え付けられたベンチに腰かける。少し離れて。

最初に口を開いたのは彼の方だった。

「…しばらくぶりだね。元気、だった？」

「この年になると、駄目ね。息子が働きだしたのが唯一の救いかしら」

「そうか…息子がいるのか、まあ当たり前だよな」

「悟さんは？20年前は綺麗な奥さんの写真、見せてくれたじゃない」

「…いや、お恥ずかしい話、10年以上前に出ていかれたよ、まあうちには子供はいなかったんだけど」

「まあ、ごめんなさいね」

「いや…いいんだ。それでこんな親父が夜中にコインランドリーで訳さ」

「うちは二人揃ってるだけまだいい方なのかしら」

「…でも、こんなさびれたコインランドリーで働いているところ見るとみっちゃんにも何かありそうだな…いや、訊かないけど」

「ふふ…うちは旦那の会社がつぶれて。もう年で日雇い位でしか雇ってもらえないから私がこつやって…」

「良いとこの課長だったはずじゃ…」

「どこも不況だもの」

二度目の沈黙を私は笑い飛ばそうとした。

「こんな暗い話はやめま…」

「なあ、俺たち、大学時代のままだったらどうなっていただろう」

私は彼が急に握って来た手を静かに払って言った。

「思い出を掘り返すのはやめて、今は今。これが現実。あの頃は楽しかったけど、それだけよ」

三度目の沈黙を破ったのは、彼のかけた乾燥機。

「じゃ、」

と言っただけでさっきまでのことが嘘だったみたいに彼は去っていた。

あれから2ヶ月。監視カメラにもう一度彼が映ることはなかった。

いまでも時々考えてしまうのだ。

―あの時。私があの手を握り返していたら。私は今もこのコインランドリーで働いていたのだろうか。

考えるだけ無駄だ。

私は頭を降って床を掃いていたほつきを持ち直した。

## ミツエ(50)(後書き)

うーん、まだ酸いも甘いも噛み分けてないから解らない。

## エリ（１９）

「靴下落としましたよ」

その声に振り返った私はその“靴下”を見て絶句した。

なぜなら彼が持っていたのが靴下なんかではなく、私のお気に入り  
のピンクの水玉パンツだったから。

「…？…あつ、す、すいません」

彼はなぜ受け取らないのかと言わんばかりの怪訝な顔で私を見つめ、  
視線を落とす。

その瞬間、彼は自分が手にしているものの正体に気づき、慌てて手  
を離れた。顔は真っ赤。

こっちも恥ずかしくなって、でもお礼は言わなきゃいけないやら、  
とりあえず、パンツを拾いながらしどろもどろになってお礼を言っ  
た。

「うーん…」

自分の部屋に帰って考える。私と同じ年くらいだったな。ちょっと  
かっこよかったな。

ぽん。

彼の耳まで真っ赤になった顔を思い出した。

なんだかまたこっちまで恥ずかしくなって頭をぶんぶん振って布団をかぶった。

「あ。」

彼に再びあったのはその5日後。

乾燥機の扉越しに目があった。

「あ、あの」

狭いコインランドリーに2人きりということに居たたまれなくなつて声をかけたものの、次の言葉が浮かばない。

「この間はすいませんでした」

何を言ってるんだ、私

「じちらこそ」

あ、思ったよりくちゃっと笑うんだな、と1人心でつぶやく。

「もしかして、そのの大学に通ってるんですか？」

この一言から始まり私達は色々な話をした。

やっぱり同じ大学に通っていること、好きな食べ物、最近の政治。

その夜の夜はもうひとつ

ぽん、

が増えた。

彼のくしゃっ、と笑う顔。

最近よく雨降るし、またあのコインランドリーにしよう。

あそこの自販機ナタデココドリンク入ってるし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8931g/>

---

こいんらんどりい。

2010年12月12日14時20分発行